

ふたりの乗せた蝶は、黒い羽に水色のラインが入った、アオスジアゲハという種類の蝶でした。マヤは、蝶に話しかけました。

「ねえ、蝶ちゃん、どうして、わたしたち、ここにいるの？」

「だって、あなた、言ったでしょう。『こんな蝶にのって空を飛ぶことができたならどんな気分なんだろうね。』って。だから、二人を乗せてあげようって、思ったんですよ。わたしは、子どもが大好きだからね。それに……」

「それに、何？」

「いや、実は二人にお願いしたいことがあるのです。」

「お願いしたいことって？」

と、ケンがたずねました。

「今はまだ秘密です。さあ、まずは、わたしたちの住む森へ二人を案内しますよ。」

と、アオスジアゲハは答えると、羽を大きくはばたかせてスピードをあげました。

「ぼくの名前は、ケンって言うんだ。こっちは、マヤ。君の名前は？」

と、ケンがたずねると、

「わたしの名前は、エルム。よろしく。」

薄暗闇をしばらく飛び続けると、やがて朝日が昇るときのように空が白み始め、その下には緑の森が広がっているのが見えました。

「さあ、もうすぐわたしたちの住む森に着きますよ。」

エルムはそう言って微笑むと、森に向かって、さらに大きく羽をはばたかせました。

ケンとマヤを乗せたエルムは、黄色い花の花びらにひらりと止まり、二人を羽から降ろすと、

「さあ、わたしたちの森に着きましたよ。花の蜜をすって一休みするとしましょう。」

と、ふうっと息を吐きました。

